HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェツラーのアウシュヴィッツからの脱走とその報告文書の運命 … イヴァン・カメネツ
著者	木村，和範; KIMURA，Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(2)：65-74
発行日	2022-09-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《翻訳》

ルドルフ・ヴルバとアルフレッド・ヴェツラーのアウシュヴィッツからの脱走とその報告文書の運命*

イヴァン・カメネツ**
木　村　和　範***（訳）

ヴェツラーとヴルバの脱走譚と彼らによる報告文書の数奇な運命は，事実にかんする限り，かなり信頼できる形で再現されている。だが，しばしば見られるように，それには様々な解釈がある。本書［本稿を収録した論文集。脚注（＊）の出所参照］の読者にとって周知の事柄は，繰り返す必要がないと思うので，最も重要な事実，とくに他に類を見ない彼らの行為にたいする戦後から現在までのいくつかの解釈にかんして，若干のコメントを述べるに留める。私のコメントは，このテーマにかんする私自身の研究の他に，関連資料，先行研究，そして回想録から得られた知識に基づいているが，私の結論がすべての点で正しいとは限らず，またこの問題に関心をもつすべての人が私に同意するとは限らないことも承知している。1944 年のアルフレッド・ヴェツラーとルドルフ・ヴルバの類を見ない行為にかんする私の解釈については，引き続き議論する必要があると考えている。

国内外の学術文献や一般向けの著作だけでなく，直接・間接の当事者による回想録やドキュメンタリー映画などには，矛盾した，しばしば相互に排他的な記述が数多くある（ホロコーストを否定する［歴史］修正主義者の作品に見られる幼稚な作り話は置くとする）。歴史学者はそれらを批判的に読み解き，とくに解釈上の驚くべき相違がしばしば生ずる理由を探らなければならない。とは言え，こうした議論や論争は，二人のスロバキアのユダヤ人収容者によるアウシュヴィッツからの脱走の重要性とその後の彼らの報告文書の運命を明らかにしており，今日まで，研究者だけでなく一般の人々の関心を集め続けてきた。そこで，自己弁明のために，ピエール・ラ・ムールの著書から引用しよう。「ある人にとって，歴史とは，過去の出来事の単なる羅列であり，…… 非常に無味乾燥で正確なリストである。しかし，このような考え方には引っ掛かるものがある。歴史は正確なものではないからである。実際，…… 歴史学はすべての科学の中で最も正確さに欠けた学問である ……。過去について話すことは，未来について話すことと同じくらい信頼がおけな

＊“The Escape of Rudolf Vrba and Alfréd Wetzler from Auschwitz and the Fate of Their Report,” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide* (*Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25 - 26 August 2015*), pp.7–17. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Institute of History of Slovak Academy of Sciences であり，研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。翻訳出版は原著者の許諾済み。訳文中の［　］内は訳者による。

＊＊Ivan Kamenec, Institute of History of Slovak Academy of Sciences

＊＊＊本学名誉教授

い。記録の中の日付は一致せず，文書は互いに矛盾している。歴史学者の意見は誰にたいしても，何事にたいしても，一致することはありえない。」[1] このような歴史観は，少し懐疑的で一般化にすぎる。しかし，この見解は，本稿のテーマにたいしても，またおそらく本書全体にたいしても部分的にせよ，当てはまっている。

個人が歴史書や社会の歴史認識に登場するきっかけは様々である。多くの場合，そのような人たちは政治，経済，文化，宗教などの分野での公人としての生活の中で，ライフワークとしたか，あるいは長く活躍したことによって，歴史書に刻まれることになる。彼らは忘れがたい足跡を残し，その信奉者たちによって追跡され，さらに新しいことを掘り起こされるだけではない。反対者たちによって再検討され，批判的な論評に晒(さら)されもする。しかし，突如「裏口」から侵入してきたかのように，迂闊にも歴史の中に飛び込んでしまい，たった一つの重要な行為によって知られるようになるケースもある。シュテファン・ツヴァイクの言葉を借りれば，「栄光の瞬間」を生きるわけである。このようなケースはかなり珍しいが，例外的に重要な出来事にかかわりをもつ，直接または間接の関係者でさえ，それが与えた本当のインパクトは十分に把握できないかもしれない。このようなユニークな行為は，社会の意識の中にゆっくりと入り込み，都合が悪いからといって忘却されてしまったり，あるいは歴史学者や目撃者が，少し遅れて過去の行為を発見して，独自の物語，解釈，もしくは不正確な事柄を付け加えたりすることもある。こうして，神話と［神話がさらに生み出されないように制限する］反神話が創造されることになる。

このことは，アウシュヴィッツ絶滅収容所からのアルフレッド・ヴェツラーとヴァルター・ローゼンベルク（ルドルフ・ヴルバ）による脱出という出来事の運命について，さらに言えば，彼らの『アウシュヴィッツ・レポート』と呼ばれるようになったものにたいする戦後の解釈についても当てはまると私は考えている。時間的に言えば，二人の「栄光の瞬間」は，1944 年 4 月 7 日から 4 月末までの約 3 週間であった。このとき，彼らは，アウシュヴィッツからの脱出をなし遂げ，その直後に早くもスロバキア領内にいて，後にヨーロッパにおけるホロコーストの最も悪名高い象徴の一つとなった死の工場にかんするかなり詳細な報告文書を書き上げた。第二次世界大戦中，アウシュヴィッツでは 150 万人近くが死亡した。その圧倒的多数が，ナチスの占領下にあったり直接の支配下にあったりしたヨーロッパ諸国のユダヤ人であった。これらの国の中には，戦時中，衛星国であったスロバキア共和国も含まれていて，多くの点でヴェツラーやヴルバの運命と切り離せない関係にある。

ポーランドの歴史学者タデウシュ・イワシュコは，1940 年夏から 1945 年 1 月までに，最大 667 人[2] の収容者がアウシュヴィッツから脱走を遂げたと述べている（ただし，これは最終数字ではなく，正確でもない可能性があることは認めている）。脱走のほとんどは，個人の自発的な試みであり，主人公は自分の命を救おうとして行動し，その結果，270 人の脱走者が捕らえられ，処刑された。残りの者（397 名）についての記録はないが，全員が脱走に成功して，生き延びたということではない。もちろん，ヴェツラーとヴルバ

(1) La Mure, Pierre. *Život Mony Lisy*. (The Life of Mona Lisa.) Bratislava: Smena, 1983.

(2) 数字は以下による。Kárný, Miroslav: Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrby. (The History of the Auschwitz Report by Wetzler and Vrba.) In Tóth, Dezider (ed.). *Tragédia slovenských židov*. (The Tragedy of the Slovak Jews). Banská Bystrica: Datei, 1992, p. 167.

の場合も，みずからの命を救いたいという動機があったことは無視できないが，二人の行為は，その目的が重要であったこと，そして他の数十人の収容者が直接・間接に協力して（現代の言葉で言えば）後方支援に当たったこと，この両方に鑑みて，特異な出来事であった。数十人の収容者が，あらかじめ選ばれた脱走者の生存にとって必要な物資（衣服，医薬品，食料，身の回り品）を集めただけでなく，二人の脱走者が所属していた非合法組織は，アウシュヴィッツの殺人マシンのことを収容所の外にいる市民に知らせるために，統計数字，図面，図表，文書を作成した。このようにして集められ，［二人に］託されたデータや数値は，明らかに正確ではなく，また正確でありえようはずもなかった。たとえ，非合法集団のメンバーが収容所の位階制度の中で「特権的」な地位に就いていたとしても，十分な根拠をもってデータを収集・加工することはできなかったからである。さらにまた，脱走者はすべての文書をスロバキアに持ち込むことに成功したわけではない。劇的な逃亡の過程で，そのうちのいくつかを失ってしまったのである。その後，報告文書をまとめようとしたときに，二人は，収容所にいたヴェツラーの2年間とヴルバの22ヶ月間の記憶，知識，経験に主として頼らざるを得なかった。このことは，戦後まもなくの1946年に，ヴェツラーがヨゼフ・ラーニクのペンネームで執筆した小冊子を出版したときに明らかにされた。その小冊子が，『四百万人の墓地アウシュヴィッツ — 1942年から1945年までのアウシュヴィッツの地獄での短い歴史と生活』(3) であり，その一部は，アウシュヴィッツからの脱走直後にヴルバと一緒にまとめた報告文書に基づいている。アウシュヴィッツの犠牲者数がかなり誇張されていることは，この本の題名からして明らかである。この数字の中には，占領下のポーランドにあったアウシュヴィッツ以外のナチスの絶滅収容所で殺された人々も含まれているようである。ヴェツラーがこの冊子を執筆した終戦直後には，まだ正確なデータが分からなかったからである。しかし，こうした事情は，『アウシュヴィッツ・レポート』そのものの効力をいささかも低下させるものではない。それは，死の工場のメカニズムをしっかりと記述しているからである。残酷な真実が，大量殺戮の工場メカニズムにかんする飾ることのない事実，数字，記述によって明らかにされていた。だからこそ，この報告文書は反ナチス・プロパガンダの道具ではないかと疑われ，その受け手に不信感を呼び起こすことになったのである。このことは，苦いパラドクスであり，この文書がスロバキアから複数のルートで国外（とくにハンガリー，バチカン，スイス）に送られ，そこからチェコスロバキア亡命政府の外交官ヤロミール・コペツキーがイギリスとアメリカに送ったにもかかわらず（それだけではないが！），編集後7ヶ月も経ってようやく公開された理由の一つにもなっている。このことに関連して，一つの疑問が生ずる。歴史学者ヤーン・フラヴィンカが気づかせてくれた疑問である。それは，1944年の春にはアウシュヴィッツ絶滅収容所に最も近いところに駐屯し，軍事的に優勢であったソ連の政治・軍事の指導部にたいして，その文書を送り付ける立場にあった人たちは，どうしてこの報告文書を送ろうとしなかったのか，という疑問である。ヴェツラーとヴルバの脱走と報告文書の作成が，連合軍のノルマンディー侵攻［1944年6月6日］とヨーロッパでの第二戦線における戦闘開始の1ヶ月以上も前に行われたにもかかわらず，

(3) Lánik, Jozef. *Oswiecim, hrobka štyroch miliónov ľudí. Krátka história a život v oswiecimskom pekle.* (Auschwitz, Tomb of Four Million People: A Short History and Life in Auschwitz Hell.) Košice: Povereníctvo SNR pre informácie, 1945.

である。この重大な，事実として見れば道徳的な問題は,いまだに解明されておらず,今後の歴史的研究の対象となるべきものであろう。

脱走譚の主役であり，また『アウシュヴィッツ・レポート』の執筆者でもある二人［ヴェツラーとヴルバ］についても，少し述べておきたい。この報告文書については，後に，1944 年 5 月末に収容所から脱走し，6 月にスロバキアに到着した二人の脱走成功者，アルノシュト・ロジンとチェスラフ・モルドヴィッツが，さらに新しいデータを用いて確認し，その不足を補っている。情報の持ち出しを主要目的とした脱走のために，ヴェツラーとヴルバが選抜されたのは，偶然ではない。彼らの肉体的・精神的状態と知的な能力に加えて，選抜にあたって考慮された要因は，アウシュヴィッツがスロバキア国境に近いこと（約 130㌔），1944 年春には，衛星国であるスロバキアがナチス・ドイツにまだ占領されていなかったこと，スロバキア全体主義政権の上層部が次第に深い内部危機に陥り，さらには敗北主義，責任逃れ，ドイツへの離反傾向が見られるようになり，脱走者が任務を達成する見通しがかなり明るくなったこと，である。当時，身を守るために，ポーランドのユダヤ人数十人がスロバキアに不法滞在していた。他方で，スロバキアのユダヤ人の絶滅収容所への強制移送が終了した 1942 年秋以降になっても，フリンカ・スロバキア人民党政権によるプロパガンダは，憎悪に満ちた反ユダヤ主義に終始しており，国民の目には人道にたいする罪を正当化するものとして映っていたと思われる。ヴェツラーとヴルバがスロバキアに帰還できた数週間後には，フリンカ・スロバキア人民党の機関紙『スロバキア』は，スロバキアに留まっているユダヤ人にたいして「スロバキアにできた危険な潰瘍で …… 我々のコミュニティの健全で穏健な判断を破壊する者」というレッテルを貼りつけた。そして，一般大衆には，「ユダヤ人に思いやりをかけることは，我々自身にたいして罪を犯していることになる。」と警告した[(4)]。スロバキア国民蜂起の勃発［1944 年 8 月 29 日］とナチス軍によるスロバキアの占領［1944 年 9 月］の後は，反ユダヤのプロパガンダは再びヒステリックな憎悪の様相を帯びるようになり，「ユダヤ人とボルシェビキが結託した反乱［ロシア革命］によって売国奴とその手下が我が物にした場所［ソ連領土］へと，ユダヤ人は再び行くことになるだろう。…… この悪臭を放つ腐った害虫は，戻ることのできない場所にうち捨てなければならない。」[(5)] と言われた。

残念ながら，脱走の手はずを整えた者と脱走者が，脱走前にスロバキアの状況を正確に知っていたかどうかを調べることはできない。ヴェツラーとヴルバは間違いなく危険を認識していたが，アウシュヴィッツ絶滅収容所と較べると，その危険度は比較にならないほど小さく，ほとんど無視できるものに思われたはずである。脱走に成功した後，彼らは，上述したようなフリンカ・スロバキア人民党政権側に見られた危機感と責任逃れに頼ってもよかろうと考えた。脱走した二人は，報告文書を作成し，ただちに国外に密かに送り届けることができただけではない。スロバキアではかなり容易に偽造身分証明書を取得できた[(6)]。つねに素性が割れてしまう危険はあったが，スロバキアがドイツ軍に占領された 1944 年 9 月までは，比較的平穏に生活することができ，二人は，レジスタンスに加わり［1944 年 8 月の国民］蜂起では積極的に抵抗した。

---

(4) *Slovák*, 7 July 1944.

(5) *Slovák*, 8 September 1944.

(6) A. ヴェツラーはヨゼフ・ラーニクの名前で公文書を入手し，戦後，回顧録を書くときにペンネームとして使った。ヴァルター・ローゼンベルクは戦後に市民生活を送るときにもコード・ネームのルドルフ・ヴルバを使い続けた。

ヴェツラーとヴルバは，性格も気質も違うが，英雄的行為［脱走］のときには，互いに補い合い，助け合っていた。6歳年上のヴェツラーが理性的なタイプであるのにたいして，脱走時18歳だったヴルバは，どちらかというと気が短く，冒険心や自己中心的なところがある。それは，共同脱走の解釈に関連するものであって，ヴルバの戦後の運命にも表れている。歴史学者は心の機微に触れる微妙な問題に直面しなければならない。個人生活にかんする限り，二人は戦後になってから進む方向が大きく異なったが，その二人を評価するとき，一方に偏った結論に肩入れしたり，あまりにも心の襞（ひだ）に入りこむような分析をしたりしてはならない。二人の脱走者が歩んだ戦後の道のりの違いは，脱走の状況にかんするその後の認識や『アウシュヴィッツ・レポート』という共著の解釈の違いにも影響しているからである。

1958年に国外に移住したルドルフ・ヴルバは，チェコスロバキアでは大学教授となり，化学研究の分野で大きな功績を残した。しかし，鉄のカーテンが降りていた当時のチェコスロバキアでは，亡命者としてのヴルバは，チェコスロバキア国民としてもスロバキア国民としても影が薄く，彼の偉業についてはもとより，彼が共同執筆した『アウシュヴィッツ・レポート』については書くことさえも禁じられていた。移住する少し前［1958年］に，プラハで『夜と霧』という著書が出版された(7)。この本には，スロバキアのユダヤ人収容者二人が初めて実名で登場し，その脱走の経緯が短く記述されていた。アルフレッド・ヴェツラーはスロバキアに留まったが，社会的に重要な地位に就くことがなかった。二人は鉄のカーテンによって実際に隔てられていただけでない。個人的な関係もこじれて，二人の間には溝ができてしまった。ヴルバが移住してからは，二人の関係は何かよそよそしくなり，難しくなったと言われている。二人は，1960年代初頭，ドイツ連邦共和国［西ドイツ］におけるアウシュヴィッツ裁判に証人として，アウシュヴィッツにいたナチスの看守や将校数人とともに出廷したが，二人がドイツ［の法廷外］で個人的に面会したかどうか，あるいは1944年4月に共に経験した事柄について話しあったかどうかは分からない。

チェコスロバキアと同様にスロバキアでも，1950年代にはホロコーストの話題はあまり歓迎されず，専門的な研究が禁止されたほどであって，このことは歴史学にも影を落としている。それにもかかわらず，いくつかの回想録が出版された。専門的なホロコースト研究はなされなかったが，主として小説，映画，ドラマなどの作品が部分的にせよ，それを代用したことはパラドックスである。これは，シオニズムにたいする残忍な思想的・政治的キャンペーンの結果であり，そのピークにあるのが，「シオニスト工作員」なる者にたいするでっち上げ裁判やユダヤ系の人々にたいする真っ正面からの差別であり，陰湿な差別であった。この差別は，1970年代から1980年代にかけた，チェコスロバキアのいわゆる「正常化」の中で，より「穏やかに」，より洗練された形で繰り返された。

「プラハの春」の改革に先立つ，もう少し「リベラル」であった1960年代，ヴェツラーはタブーを破り，自分とヴルバによるアウシュヴィッツからの逃避行の状況を文学の形で再現した。ヨゼフ・ラーニクというペンネームで1964年に『ダンテが見なかったこと』という著書を出版したのである(8)。この著書のジャンルは，小説と回想録の中間に位

(7) Kraus, Ota and Erich Kulka. *Noc a mlha*. (Night and Fog.) Praha: Naše vojsko, 1958.

(8) Lánik, Jozef. *Čo Dante nevidel*. (What Dante did not see.) Bratislava: Osveta, 1964.

置する。ヴェツラーはカロルの名で，ヴルバはヴァレールの名で登場する。その後，著者ヴェツラーの死後の 1988 年に第 2 版が出版され，1990 年代初頭の社会変化の後には，さらに 2 回，版が重ねられて，全部で 3 回，版が改められた。第 4 版は 2009 年に著者の実名で出版された[9]。この第 4 版では，ヴェツラーとヴルバによる『アウシュヴィッツ・レポート』の全文がスロバキアで初めて出版されたほか，ヴルバとヴェツラーの脱走を取り上げた三人の歴史学者による専門論文の収録が特筆される。スロバキアの著名な文芸評論家 A. マトゥシュカは，この著書を「このジャンルでの最高の小説」と呼び，「著者は無駄な感傷を排して …… 人間らしい情熱をもって自分の体験を語っている。」と強調した[10]。マトゥシュカの言葉は，ヴェツラーの著書の特徴を言っているだけではない。1963 年にドイツの法廷で供述したヴェツラーの理性的な証言からも明らかなように，彼自身の経験にたいする捉え方の特徴をも言い当てている[11]。

興味深いのは，ヴェツラーの著書が出版される少し前に，アラン・ベスティックというジャーナリストとの共著で，ヴルバも『許せない』(1963 年) というタイトルで，アウシュヴィッツにいたころと脱走の思い出をロンドンで出版していることである[12]。この著書は，専門家の間でも，一般読者の間でも，大きな関心を呼び起こし，すぐ後にアメリカやドイツでも出版された。おりしもエルサレムで行われたアイヒマン裁判 (1961 年～62 年) の影響もあり，欧米ではホロコーストというテーマへの関心が目に見えて高まっていた。1989 年，ヴルバとベスティックの共著の改訂版が出版された。そのタイトルは『囚人番号 44070 番 — 20 世紀の陰謀』と改題された[13]。タイトルの数字は，1942 年 6 月にアウシュヴィッツに到着したときに入れ墨されたヴルバの囚人番号にちなんでいる。さらに，この本は 1997 年に『私はアウシュヴィッツから脱走した』というタイトルでチェコ語訳が出版されたが[14]，このときはベスティックとの共著ではなかった (この理由や著作権契約の詳細は分からない)。現在，そのスロバキア語版の出版が進められている。歴史学者の厳しい専門的判断によれば，ヴルバの読みやすい著書には，軽微ながら不正確な記述があったり，そこで下されている評価については議論の余地があったりする模様である。とは言え，それは脱走という事実そのものについてではない。戦時中のスロバキアという国の歴史にかんするより一般的な記述とか，あるいは脱走の意図とか脱走がもたらした結果とかにかんする議論の余地のある評価についてである。

1968 年以降にもチェコスロバキアにいたヴェツラーの立場とそのときにはすでにカナダに住んでいたヴルバの立場は異なっている

(9) Weltzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel*. (What Dante did not see.) Bratislava: Milanium, 2009.

(10) Weltzler, A. *Čo Dante nevidel*. (What Dante did not see.) Alexander Matuška's epilogue to the first edition, pp. 256–257.

(11) 1. Frankfurter Auschwitz-Prozess »Strafsache gegen Mulka u.a.«, 4 Ks 2/63. Landgericht Frankfurt am Main. 108. Verhandlungstag, 5.11.1964. Vernehmung des Zeugen Alfred Wetzler. Dostupné na internete (Available on the Internet)：ヴェツラーによる法廷証言の記録を公開してくれたヤーン・フラヴィンカ氏にお礼申し上げる。http://www.auschwitz-prozess.de/index.php?show=Wetzler-Alfred を見よ。[2022 年 6 月 10 日に訳者がアクセスしたが，アクセス・エラーとなった。]

(12) Vrba, Rudolf and Alan Bestic. *I cannot forgive*. London: Sidgwick and Jackson, 1963.

(13) Vrba, Rudolf and Alan Bestic. *44070. The Conspiracy of the Twentieth Century*. Bellingham: Star and Cross Pub, 1989.

(14) Vrba, Rudolf. *Utekl jsem z Osvětimi*. (I escaped from Auschwitz.) Praha: Sefer, 2007.

が，二人の立場の違いは，それぞれの単独行動と『アウシュヴィッツ・レポート』についてのその後の解釈にも，かなりはっきりとした痕跡を残すことになった。1970 年代初頭から，ヴェツラーは抑圧された社会にいて，ある程度ながら孤立した市民生活を送り市民から隔絶されていた。妻のエタによれば，ヴェツラーは 1944 年の出来事について，西側のジャーナリストにたいしてインタビューはおろか，いかなる情報提供もかたくなに拒（こば）んだ（国内のジャーナリストには取材の興味もなければ，おそらく取材を申し入れる勇気もなかったのだろう）。ところが，ヴルバは，こと取材にかんしてはかなり積極的であり，ジャーナリストから見れば，インタビューに応じてくれる歓迎される人物であった。西側の多くの歴史学者にとって，ヴルバはアウシュヴィッツからの脱走を直接，しかも望んで目撃しただけでなく，『アウシュヴィッツ・レポート』の生みの親という稀有な存在であった。もう一組の脱走者の一人で，同じくカナダに住んでいたチェスワフ・モルドヴィッツは，この方面［マスコミ対応］にはあまり積極的ではなかったために，第二組目のスロバキアのユダヤ人コンビによる逃亡は，歴史学でも一般にも，あまりよく知られてはいない。このような点から見ると，ヴルバの活動は確かに評価されなければならない。しかし，上記の二冊の出版物を除けば，ヴルバが関心を持つ人々にどのような情報を提供したのかは，我々には分からないし，それを示す直接的な証拠も持ちあわせていない。仮説と間接的な憶測の域に留まっている。西側のほとんどの解釈によれば，ヴルバがこの出来事全体を主導した最重要人物であるかのように見えるのは事実であるが，私見では，この見方は，現実の出来事と完全に一致しているとは言いがたい。外国の著者が執筆したこの脱走譚の中には，ヴェツラーの名前さえ出てこないものがある。これは驚きである。そこで改めて責任の所在を明らかにする目的で，スロバキアにおけるホロコースト研究の第一人者であるイスラエルの歴史学者ヤシャヤフ・A. イェリネクの著書『タトラ山脈の麓のダビデの星 — 20 世紀スロバキアのユダヤ人』によって，評価することにしよう。1944 年 4 月の出来事にたいする戦後の解釈について，イェリネクは次のように書いている。「戦後，脱走について様々な伝説が生まれ，様々に解釈されるようになった。それには，脱走者の一人であるローゼンベルク［ヴルバ］にも責任がある。…… 彼は，ヴェツラーがスロバキアに残っていて，自分の言い分に反対できないことを利用した。」(15)

これは，脱走という歴史的事実の表現方法にかんする非常に微妙な問題である。引用したイェリネクの評価も私のコメントも，ヴルバの戦後の活動を貶（おとし）めるものではなく，脱走とそれに続く『アウシュヴィッツ・レポート』の編纂の重要性を相対化したり，ましてや軽んじたりしようとするものでもない。ヴルバは，脱走と編纂の両方で重要で否定しがたい役割を果たしたからである。私は，このような他に例を見ない英雄的行動をとった勇気ある二人の逃亡には，さらに飾り立てたり，主観的に歪曲したり，あるいは理想化したりする必要がないと確信している。そのようなやり方は，真相を解明するときの妨げになるだけでなく，修正主義者に安っぽい議論へと道を開きかねないからである。なお，とくにポーランドでは，絶滅収容所から脱走した収容者の個人的な証言がもつ重大性とそれによる成果がどの程度かについて，長らく議論され，論争の的にもなっていることを付言して

（15）Jelínek, Ješajahu Andrej. *Dávidova hviezda pod Tatrami. Židia na Slovensku v 20. storočí.* (Star of David under Tatra Mountains: Jews in Slovakia in the 20th Century.) Praha: Ipeľ, 2009, p. 349.［タトラ山脈はその 20％がポーランドに，その 80％がスロバキアにある，スロバキアを代表する山脈。］

おく。

ここで,『アウシュヴィッツ・レポート』の実際の内容にかんする曖昧な解釈について,若干コメントしておきたい。この報告文書の他に例を見ない重要性については,それを著した二人の,これまた他に例を見ない英雄的行為と同様に,疑いの余地はあろうはずがない。この報告文書の意図は,ヨーロッパの世論,とくに反ヒトラー連合で影響力をもった指導層に向けて警鐘を鳴らすことであった。当初の意図,とくに意図した時期にかんする限り,その目的は達成されなかった。しかし,ヴェツラーとヴルバには,このような結果になったことについては何の責任もない。『アウシュヴィッツ・レポート』の気の毒な運命を最もよく知る研究者の一人であるチェコの歴史学者ミロスラフ・カールニーは,この報告文書が「単なる歴史的な文書とかアウシュヴィッツの犠牲者のための墓碑銘に終わらせようと意図したのではなく,人類への警告となり,人々に行動を促すものになって欲しかった。…… 勇気あるアウシュヴィッツの囚人たちが発するメッセージには,事実にもとづく資料として達成したことがあるのであって,歴史学者は,尊敬と賞賛の念をもって,その前で頭(こうべ)を垂れなければならない。」と言っている[16]。そうであればこそ,『アウシュヴィッツ・レポート』がその目的地(バチカン,イギリス,アメリカ)にたどり着くまでに,数ヶ月も要したのはどうしてか,連合国が,口頭での警告で済まさないで,少なくともアウシュヴィッツに通ずる鉄道を爆撃しなかったのはなぜか — それは,不明であり不可解でもある。

おそらく,最も腹立たしく,これまで十分な答えがなされていない疑問というのは,1944 年 4 月末の編纂後,数日のうちにヴェツラーとヴルバの報告文書を受け取っていながら,ハンガリーのユダヤ人指導層が梨のつぶてを通したのはどうしてかということであろう。そのころ,ハンガリーはドイツ軍に占領され[占領は 1944 年 3 月 19 日],ユダヤ人コミュニティにいた 70 万人以上もの人々が生命の危険に晒されていたのに,である。[ハンガリーのユダヤ人にたいする]強制移送が開始したのは,1944 年 5 月のことで,奇しくもそれはスロバキア南部の併合地からであった。しかし,ハンガリーのユダヤ人指導層は,この報告文書をユダヤ人コミュニティの目に触れないようにした。それは,コミュニティの人々を怖がらせたくなかったからか,軍事的敗北が近づいていたナチスが,それでもなお殺人計画を実行し続けるとは思わなかったからか,あるいはとくに「ユダヤ人の生命と[物資を搭載した]トラックとの交換」という「物資と血の交換」計画について,アイヒマンと交渉していたからか。ヴルバを含む何人かの著者は,ハンガリーのユダヤ人指導層が受動的で洞ヶ峠を決め込んでいたことを非難している。歴史学者はこの非難がもっともだと受け入れることはできるが,それと同時に,ハンガリーのユダヤ人が強制移送に抵抗する現実的な可能性はどうであったのか,ということも問わなければならない。歴史学者は事実を述べることはできても,判断を下す権利はない。戦後の主張にもかかわらず,ヴェツラーとヴルバが,とくにハンガリーのユダヤ人にたいしてあの報告文書によって警告を発するという具体的な任務を帯びて,アウシュヴィッツから脱走したということを証明するに足りる信頼できる資料はない。事実,『アウシュヴィッツ・レポート』のどこにも,ハンガリーからの強制移送の危険が緊迫しているということは,触れられていない。私の考えでは,ヴェツラーとヴルバの報告文書とその影響によって,最大でハン

(16) Kárný, M. Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrby..., (The History of the Auschwitz Report by Wetzler and Vrba...,) pp. 168-169.

ガリーのユダヤ人10万人が死の工場への強制移送から救われたということについては，少なくとも議論の余地がある。ハンガリーのユダヤ人約43万5000人が，すっかりハンガリーの主として郡部から強制的に連行され殺害されてしまった1944年夏になって，ようやく強制移送は停止された。強制移送の中止理由は様々あって，『アウシュヴィッツ・レポート』が重要な役割を果たしたことは否定できない。この問題のさらなる解明は今後の研究に残されていて，我々もそれを議論することになるであろう。

本稿を擱筆するにあたって，ヴェツラーとヴルバの脱走が，ホロコースト史におけるヨーロッパのユダヤ人による抵抗の中で最も重要な出来事の一つであるということは，言っておかなければならない。悪をなし，基本的人権と道徳律をないがしろにする政治権力は，いかなるものであろうとも，その犯罪を永久に隠しおおせるなどと思ってはならない。この意味で，二人の脱走には倫理的なメッセージが含まれてもいるのである。

快く思われないかもしれないが，最後に，時事問題について一言。何十人もの人々が命の危険に晒されながら，アウシュヴィッツからの脱走者を支援した。このとき，支援した人たちにとって宗教，国籍，社会的背景は，助ける人を決めるときの基準ではなかった。どのような類推適用にも違和感を覚えることは承知しているが，あのときの人道と自己犠牲の原則は不変のままであり続けている。その原則は，先進的で独善的にして利己的ですらあるヨーロッパが必死になって取り組んでいる現代の難民危機にも適用されるべきものであろう。

定期刊行物

Slovák

参考文献

Jelínek, Ješajahu Andrej. *Dávidova hviezda pod Tatrami. Židia na Slovensku v 20. storočí*. (Star of David under the Tatra Mountains: Jews in Slovakia in the 20th Century.) Praha: Ipeľ, 2009.

Kárný, Miroslav. Historie osvětimské zprávy Wetzlera a Vrby. (The History of the Auschwitz Report by Wetzler and Vrba.) In Tóth, Dezider (ed.). *Tragédia slovenských židov.* (The Tragedy of the Slovak Jews.) Banská Bystrica: Datei, 1992.

Kraus, Ota and Erich Kulka. *Noc a mlha*. (Night and Fog.) Praha: Naše vojsko, 1958.

La Mure, Pierre. *Život Mony Lisy*. (The Life of Mona Lisa.) Bratislava: Smena, 1983.

Lánik, Jozef. *Oswiecim hrobka štyroch miliónov ľudí. Krátka história a život v oswiecimskom pekle*. (Auschwitz, Tomb of Four Million People: A Short History and Life in Auschwitz Hell.) Košice: Povereníctvo SNR pre informácie, 1945.

Vrba, Rudolf and Alan Bestic. *44070. The Conspiracy of the Twentieth Century*. Bellingham: Star and Cross Pub, 1989.

Vrba, Rudolf and Alan Bestic. *I cannot forgive*. London: Sidgwick and Jackson, 1963.

Weltzler, Alfréd. *Čo Dante nevidel*. (What Dante did not see.) Bratislava: Milanium, 2009.

1. Frankfurter Auschwitz-Prozess »Strafsache gegen Mulka u.a.«, 4 Ks 2/63. Landgericht Frankfurt am

Main. 108. Verhandlungstag, 5. 11. 1964. Vernehmung des Zeugen Alfred Wetzler. (http://www.auschwitz-prozess.de/index.php?show=Wetzler-Alfred.)［2022 年 6 月 10 日現在アクセス不能。Inaccessible as of 10 June, 2022.］